

必殺暗示人

52才という若さで世を去った母は(明治44年生)、4人の子供を育てるだけで、その一生を終えた感があります。

小学生のころ私は、近くの米屋で配達のアアルバイトをしていました。

配達した軒数で1日5円とか10円とか、貰った記憶があります。

自分の竹筒(貯金箱)に1・2ヶ月分が貯まった頃、母は決まってこういいました。

『それ貸してね』。

『エエ、何で〜』と、やけくそになりながら竹筒を壊し、お金を取り出したことを覚えています。

不思議なことが、起こりました。

そう時間を要することなく、母と一緒に竹筒を割るのが楽しくなって来たのです。

自分も何かの役に立っているのだ、そんな実感がそうさせたのかも知れません。

今考えると半分は生活のため、半分はそう実感させるための、^{はかりごと}謀^しだったのではと、思えてなりません。

日本中の全部が、貧しい頃の話です。

そんな混乱の中であって、「^{しつけ}躰」とも「指導」とも「教育」とも呼べない、へんてこりんな母親の啓示がありました。

幾つかは、今でもはっきりと覚えております。

一つは、私のことを「敏彦さん」と、必ず「さん付」で呼んだこと。

一つは、注意するとき、やはりこれも必ず、「敏彦さんらしく、ないじゃありませんか」と論されたこと。

一つは、小学生の遠足のとき、もしトイレに行きたくなったら次の通りにしなさい。

付近に転がっている、なるべく小さくて丸い石ころを探しなさい。

それをズボンの、「右ポケット」に入れなさい。

不思議なことに、トイレに行きたくなくなります、といわれたこと。

一つは、貴方は勇気があるのに、その勇気が沸き出ないかも知れません。

でも大丈夫です、次のことを実行しなさい。

手で静かに胸を叩きながら、「自分には勇気がある、勇気がある」と唱えなさい、といわれたこと。

一つは、高校に合格した途端、父親の転勤で住居移動の必要に迫られた折のことです。

姉二人は就職のため既に東京に出ており、弟を含め4人で生活していました。

『冗談じゃあねえよ、入学出来たばかりの高校を転校するなんて、オイラはや・だ・ね、断固^が反対だよ』。

我を張る私に母は、簡潔明瞭!こう言ったものです。

『そう、それなら貴方はこの地に一人で住みなさい、貴方なら一人で大丈夫です。わたしたち3人は移り住みます。一家の大黒柱の面倒を見ることは、当たり前のことですから、…』。

およそ今では考えられない、「子供の単身生活」が、実際に始まってしまったのです。

「さん」と呼ぶことで、“一人の個”として認めていることを暗示させ、「貴方らしくない」という叱り方で、「貴方らしいとは何なのだ」を想起させ、小さくて丸い石ころをポケットに、しかも右ポケットにと、細かく指示することでトイレを忘れさせる魔法を使い、そして胸に手を当てる勇気の暗示は、今も続いているほど我が身に深く、…今考えると、必殺仕掛人“藤田まこと”を凌ぐ、^{しの}「必殺暗示人」だったといえそうです。

自分の我とは申せ、高校1年からの一人生活は、身の回りの為すこと的一切を、「修行の場」に変えました。

炊事、洗濯、掃除、ほころび縫いにボタン付けなど、およそ日常生活に必要な作業は何でもやりました。イヤ、やらざるを得なかったのです。

結果としていえばそのことが、後の人生に大変な力を与えてくれることになったのです。

経済的困窮さに埋もれながら、大日如来さまの如き^{こと}心で、母は私を導いてくれたのです。

…イヤ、コレは誉め過ぎです。

素晴らしい記憶しか浮かんで来ないのが不思議です。

理由は二つあります。

一つは、母が52才という若さでこの世を去ってしまったことです。

今も存命なら、「コリヤ何ていう母親なんだ」と辟易し、ボヤキたくなる場面に山ほどぶつかったに違いありません。

一つは、仮に子が、親の存在を明確に確認できる年齢を、小学生の後半からだとしたならば、あの高校1年生での单身生活を切っ掛けに親元を離れたため、母と共に過ごした年月は、たったの7～8年に過ぎなかったからです。

であればこそ、母親雑感記でありましょうか。

「子は親の所有物ではありません」、…あらゆ

る事を承知の上で、私を早々に突き放した、母の“勇氣”に誇りを感じます。

お金では買えない体験、勇氣の啓示、様々な知恵。

しかしこれも今考えますに、52才で生涯を閉じた母から私への、『どう、参ったでしょう』とする、「してやったり」の対決のメッセージだと思えてなりません。

斯様に如来様は、どこかに「茶目っ氣」を持っていなければなりません。

そして今でも、まだまだ苦勞が足りませんよと、ほほ笑んでいるに違いないのです。

凡句楽

面白知識

二つの違い「徳利」と「銚子」

年末年始は何かと飲む機会が多いと思うが、居酒屋などで飲む時は「銚子1本!」という注文をするし、そういう声を耳にしたりする。注文に対し運ばれて来るのはたいてい「徳利」だ。「銚子」が運ばれてくる店など、いまだかつて見たことがない。実は「徳利」と「銚子」はまったくの別モノである。

「徳利」

江戸時代の終わりころに登場した酒器。大量生産の焼物で、たちまち日本酒＝「徳利」というほど各地に広まった。首のあたりが少しくぼんだ細長い形状。陶製、金属製、ガラス製などさまざまあり、酒だけでなく、しょうゆ、酢などを入れる容器も、その形状から「徳利」とされる。朝鮮語の「とくり」に由来する言葉で、話し言葉として促音化され、「とっくり」と変化した。現在居酒屋などで用いられているのは、ほぼ100パーセント「徳利」と言ってもよい。

「銚子」

長い柄のついた鍋形の注ぎ口のある酒器のことで「さしなべ」の変化したもの。木製、または金属製が主流。和式の結婚式を経験した人なら見たことがあるはずだ。「三々九度の杯」のときに巫女さんが酒を注ぐ酒器、あれこそ「銚子」なのである。近年は婚礼用にしかお目がかかれないほど希少な酒器なのに、言葉としては、むしろ「徳利」よりも多用されているところが不思議だ。注ぎ口が片口と両口の二種類あり、正式な場では片口を、略式には両口を利用していた。

「知って得する二つの違い」(廣済堂文庫より)